自信をもってたくましく生きる力を育む集団づくり
―自己有用感を高めることを通して―

笹沼　有美・小野瀬善行

宇都宮大学共同教育学部教育実践紀要　第10号　別刷

2023年8月31日

宇都宮大学共同教育学部教育実践紀要　第10号　2023年8月31日

自信をもってたくましく生きる力を育む集団づくり†
―自己有用感を高めることを通して―

笹沼　有美*・小野瀬善行**
宇都宮市立旭中学校*
宇都宮大学大学院教育学研究科**

先行研究の分析枠組みを参照して、筆者の前在籍中学校の生徒の「自己有用感」に関するアンケート調査の結果を分析し、生徒の実態を把握するとともに今後の手立てについて検証を行った。教師や友達、家族など信頼できる他者との関わりの中で自分自身と向き合い、自分がすでにもっているよさに気付くという過程が、生徒達の「自己有用感」に大きな影響を与えていると言うことを再確認することができた。

キーワード：自己有用感　集団づくり

1．本研究の背景

内閣府「我が国と諸外国の若者の意識に関する調査（平成30年度）」によれば、諸外国に比べ日本の若者の自尊感情等が低いことが問題視されているものの、日本の若者の場合、他者にとって自分がどう役立つかによるという特徴があり、他者にとって自分がどう役に立つかという「自己有用感」と自分への満足感が比較的強く関連するという自尊感情のあり方が指摘されている。このことから「自己有用感」という視点を十分加味しながら自尊感情について考察を行うことの重要性が示唆されている。そこで本研究では、これらのことを踏まえて「自己有用感」に注目して、事例校における量的調査を行った。

2．研究主題設定の理由

中学校教員として、多くの子どもと出会い関わってきた。楽しそうに学校生活を送る姿、何かにひたむきに取り組む姿がある一方で、自分に自信がもてない、周りとうまく関われないといった姿もあった。こういった自信のなさや人間関係の希薄さが学習意欲の低下や人間関係のトラブル、学校生活不適応へとつながっているのではないかと考える。「自分の大切さとともに他の人の大切さを認めること」は、人権教育の大切な視点でもある。自分と他の人の大切さが認められるような環境、人間関係づくりが求められている。そういった関係が自己有用感を高めることにもなり、自信をもってたくましく生きていける集団づくりにつながるのではないかと考え、本主題を設定した。

3．研究主題に対する基礎的内容

文部科学省（2008）は、「人権教育が効果を上げうるためには、まず、その教育・学習の場自体において、人権尊重が徹底し、人権尊重の精神がみなぎっている環境であることが求められる。」と述べている。ここでいう、人権尊重が徹底し、人権尊重の精神がみなぎっている環境とは、自分の大切さや他の人の大切さが認められるような環境のことをいい、お互いの失敗や間違いを受け入れられ、認められるような集団のことであり、一人一人を大切にした温かな雰囲気の集団のことを指すといえよう。つまり、「人権が尊重された雰囲気や環境をつくる」ことが重要であり、その基盤となるのが、自分自身を大切に感じる自尊感情である。自尊感情とは、自分自身を大切に感じるという実感であり、人権教育を進めていく上で重要な環境づくりのもととなる。

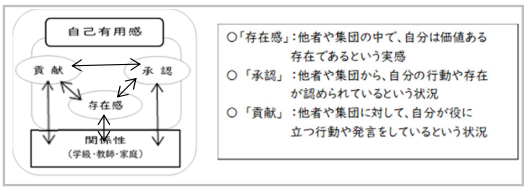
---

† Yumi SASANUMA*, Yosiyuki ONOSE**: Analysis of present state of Self-esteem among JHS students
Keywords: Self-esteem, Group Development and Activation

* Asahi Junior High School, Utsunomiya
** Graduate School of Education, Utsunomiya University
（連絡先：yonose@cc.utsunomiya-u.ac.jp　小野瀬善行）

さらに本稿では、自尊感情と類似の言葉で「自己有用感」に着目することとした。自己有用感という概念について、滝（2005）は、「自分がしたことを感謝されてうれしかった、自分は頼りにされている、自分も誰かの役に立っている、みんなから認められている。（略）他者と交流することで得られるそうした感情」と説明している。自尊感情・自己肯定感は自己のみで成り立ちうる自分に対する自己評価が中心なのに対し、「自己有用感」は、他者や集団との関係の中で成立する概念であり、自分に対する他者からの評価が中心となる。人の役に立った、人から感謝された、人から認められたなど、自分と他者（集団や社会）との関係を自他共に肯定的に受け入れられることで生まれる、自己に対する肯定的な評価である「自己有用感」に着目して考察を進めて行く。

栃木県総合教育センター（2013）は、「自己有用感」を構成する要素として、次の三つを挙げている。



また、「自己有用感の高い児童生徒は集団の中で、他者と協同しながら、主体的に生活している傾向にあることがわかっており、自己有用感と望ましい意識や行動には強い関連がある」ことが報告されている。ここで挙げられている意識や行動は人権教育を通じて育てたい資質・能力とも重なる。

以上のことから、2013年に栃木県総合教育センターが行った調査結果、提言などの枠組みを活用し、筆者の在籍中学校の生徒の自己有用感に関するアンケート調査の結果を分析し、生徒の実態を把握するとともに今後の手立てについて検証する。

4. 調査

(1) 調査対象

栃木県総合教育センター（2013）の「ふだんの生活や思っていることに関するアンケート」を使って、在籍中学校の1年～3年までの約600名の生徒を対象に質問紙（グーグルフォーム）を使って無記名、出席番号のみを記入で実施した。また、教室に入れない生徒（別室登校生徒）に対しても任意で同じアンケートを実施した。

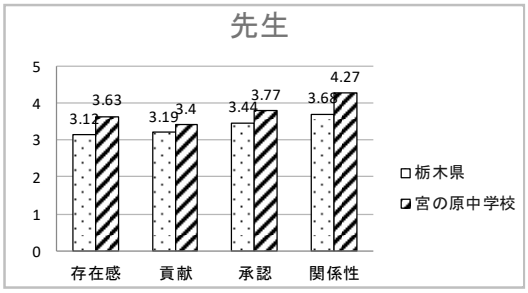
(2) 調査内容

質問1では、生徒にとって身近な他者や集団の中から「クラス」と「家庭」、身近な大人の代表として「先生」の三つの関係を取り上げて、それぞれの自己有用感を測る。質問2では、子どもを取り巻く「教育的環境・関わり方」として、友達、先生、家族の人などの様子や関わりなどについて、他者を評価する形式の質問項目で調査し、「自己有用感」との関連を分析し、子どもの自己有用感を高めるためには、どのような教育的環境や関わり方が求められているかを明らかにした。

5. 総合考察

(1) 調査結果からわかったこと

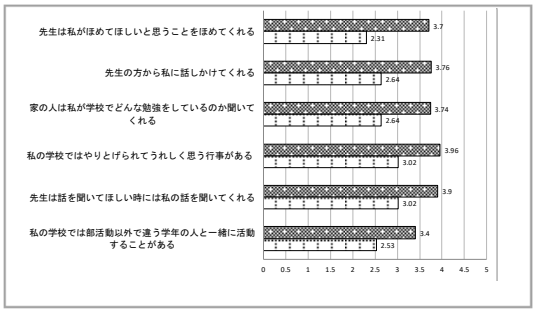
ア．前在籍校の自己有用感



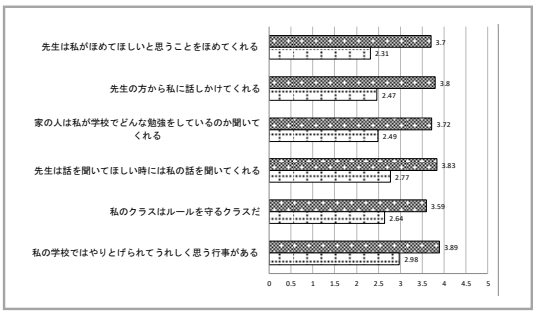
前在籍校の生徒の「自己有用感」は10年前の栃木県内の抽出中学生の「自己有用感」調査と比較して、すべての領域、すべての要素において高かった。特に「先生との関係における自己有用感」では、10年前の栃木県は2番目が「貢献」、3番目が「存在感」であったのに対し、在籍校は2番目と3番目が逆であった。これは、「貢献」が低いということではなく、「存在感」が極めて高いと言える。「先生の役に立っている」「先生から信頼されている」「先生にとって重要な生徒だ」と感じている生徒が多いことを示している。

イ．教育的環境・関わり方

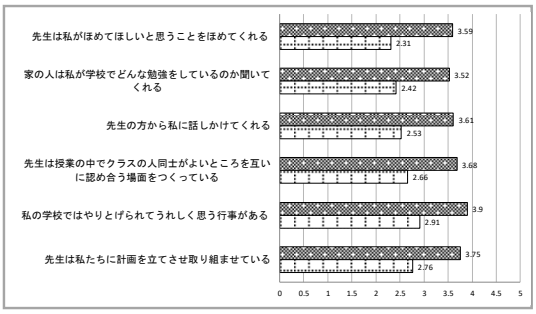
＜1年＞



＜2年＞

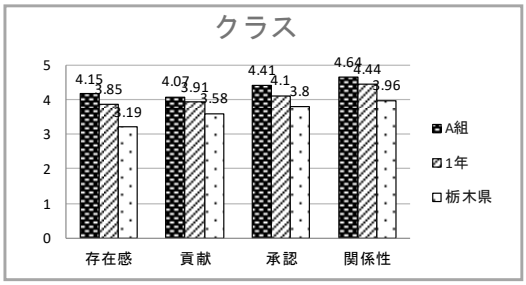


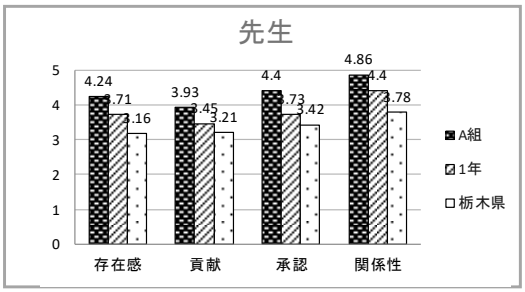
＜3年＞



自己有用感の高群と低群の差からどんな環境や関わり方が自己有用感の高低に影響しているのかを見た。自己有用感を高める効果が高いと考えられる教育的環境や関わり方について、学年が上がるに従って違いがあることが分かる。その結果、中学1年から3年まで共通して影響していた第1位が、「先生は、私がほめてほしいと思うことをほめてくれる」であった。ここで大切なのは、私がほめてほしいと思うことをという点である。つまり、先生は、この生徒は何をどのように頑張ったのか、結果だけを見るのではなく、過程をしっかりと見た上でほめてほしいポイントを見極める必要があることを意味している。もう一つどの学年にも共通してあげられていた項目が、「家の人は、私が学校でどんな勉強をしているか、聞いてくれる」であった。上位に入った項目のうち、唯一あがった「家の人との関わり」に関する項目であった。では、各学年特有の回答が出た項目について考えてみたい。中学1年では、「私の学校では、部活動以外で、違う学年の人と一緒に活動することがある」である。小学校ではたくさん行われていた縦割り班的な活動が、中学校に入ると、部活動や委員会活動という限られた活動のみになってしまう。中学1年生にとって、先輩方はあこがれの存在でもあり、一番近い見本でもある。そういった意味からも先輩との関係性が自己有用感に影響を与えていると考えられる。中学2年では、「私のクラスは、ルールを守るクラスだ」である。中学生の中でも2年生は一番難しい時期でもある。楽しければ何でもいいと思う生徒がいる一方で、楽しさと同じくらい、あるいはそれ以上に正しさを求める生徒もいる。子どもではなく、一人の大人、一人の人間として成長していく時期なのである。だからこそ、規範意識をしっかりもつことの大切さが自己有用感にも影響を与えていると言える。中学3年では、「先生は、授業の中で、クラスの人同士がよいところを互いに認め合う場面を作っている」「先生は、私たちに計画を立てさせ、取り組ませている」という項目が上がっている。中学2年からさらに成長し、自分のこと以上に周りに目を向けることの大切さや将来に向けて、計画を立てることや実行することの大切さといったことが自己有用感に影響していると考えられる。このように、中学校1年から3年という成長段階をよく表している結果であり、教育的環境や関わり方が自己有用感を高める上でいかに大切かということ、そして、成長段階によってその求めているものが違うということを教師は理解する必要があることを表している。

ウ．担当学級の自己有用感





図からもわかるように、前在籍中学校の1年生平均、10年前の栃木県の中学1年生平均と比較した。「存在感」「貢献」「承認」「関係性」のすべての要素において、その平均値が高かった。一人一役を与え

てその生徒に任せる、学校行事はもちろん、普段の何気ない生活の中で友達の良さを認める場面を意図的に作る、誰とでも対等に話せる関係を作るためにエンカウンターやアサーションを積極的に取り入れる、などに取り組んできた結果と言える。特に、関係性においては、5段階中、4.64という極めて高い値となった。これは、バランスの良い人間関係が築けていることの表れでもあり、学級という集団が彼らにとって安全な場所であるという認識のもとで成り立っていると言える。

エ．不登校生徒の自己有用感

別室に登校している生徒の「自己有用感」は、教室に登校している生徒と比較すると、すべての要素において低いことがわかった。教室に行けていないことへの引け目などの表れであると考えられる。しかし､注目すべき点もあった｡｢先生との自己有用感」は、予想された値よりも低くなく、特に「関係性」においては、0.27ポイントしか下回っておらず、10年前の栃木県の平均よりも上回っていることがわかった。これは、別室ではあっても担任の先生を中心にたくさんの先生方が声掛けをし、一人の生徒として、人間として、彼らの気持ちに寄り添い、今ある彼らをありのままに受けとめていることの表れであると考えられる。「自分は自分でよい」という自己肯定感の低下や自分への　自信のなさは、「自分にはできない」という感情へとつながってしまう。他者との関係の中で、自分のよさに気付ける機会はとても大切で、学級にいるときが最大のチャンスなのかもしれない。今回の調査結果を受け、自己有用感を少しでももたせることが不登校の未然防止につながるのではないかと考える。

(2) 自己有用感を高める手立て

今回の調査を通して、教育的環境や関わり方を工夫することで､自己有用感が高まることがわかった。良好な人間関係のもとで他者や集団に｢貢献｣し､｢承認」されることで、他者や集団における「存在感」が高まる。そして、それと同時に、「存在感」が他者や集団に｢貢献｣したいという意欲につながり､｢貢献」できたことで満足感を得たり、「承認」されたりすることになる｡そういった意味で､｢自己有用感」は、構成する主な要素「貢献」「承認」「存在感」が相互に関連し合って高まっていくと言える。

(3) 校内研修

前在籍校において、調査結果についての校内研修を行った（2023年3月22日に実施）。生徒の自己有用感尺度を共有し、学校として、学級として、一人一人の生徒の実態として、考えられる課題や今後の手立てについて話し合うことができた。今後もこういった研修を継続して行っていきたいという意見が多かった。

6. 研究のまとめと課題

今回の研究では、自尊感情の一部である「自己有用感」を中心に、人権教育について様々な方向から学ぶことができた。自尊感情という心の基盤を育むためには、教師や友達、家族など信頼できる他者との関わりの中で自分自身と向き合い、自分がすでにもっているよさに気付くという過程が大切である。自己を肯定的に捉えられる感覚である｢自己有用感」が高まることにより、異なる価値観をもつ相手を受容できたり、自分の大切さを他の人の大切さにつなげたりすることができる。そして、そういった自他ともに尊重し合える温かい人間関係が｢自己有用感」を高めることにもつながり、自信をもってたくましく生きていける生徒の育成につながるのではないか、と考える。

今後の課題として、教科の授業の中で学びを充実させることを通して、「自己有用感」を高められるような実践を追求していきたい。また、中学校ではあまり行われていない異年齢交流活動について、その方法や形態について、他の教職員と連携を図りながら工夫して取り組んでみたい。さらに、自己有用感と不登校などの予防的観点からの支援の関係についても検討していきたい。

【注記】1を小野瀬が､2以降を笹沼が分担執筆した。

引用文献

・文部科学省（2008）．人権教育の指導方法等の在り方について【第3次とりまとめ】
・滝充（2005）．規範意識の形成と教師の指導力　国立教育政策研究所 生活指導センター
・栃木県総合教育センター（2013）．高めよう！自己有用感

2023年3月31日 受理

Analysis of present state of Self-esteem among JHS students

Yumi SASANUMA, Yosiyuki ONOSE